

I 企画（演じられる性）

企画分科会：演じられる性—現代中国の演劇・映画におけるジェンダーロールとナショナルイメージの交錯と逸脱

座長：濱田麻矢（神戸大学）

報告 1：三須祐介（立命館大学）

「秋海棠」から「紅伶涙」へ—移ろう“男性性”をめぐる—

報告 2：田村容子（金城学院大学）

「救国の妓女」を描く中国映画—社会主義文化における女性の身体と国家の想像

コメンテーター：小笠原淳（熊本学園大学）、津守陽（神戸市外国語大学）

20 世紀以降の中国においては、革命および戦争を背景として、家父長制のイデオロギーにもとづくジェンダーロール（性別役割）の変革がめざされてきた。とりわけ戦時期のナショナルイメージの形成とジェンダーロールが密接な関わりをもつことは、中国女性史研究の分野においてつとに指摘されている。

本分科会は、20 世紀以降の中国の文芸作品のうち、とくに演劇や映画を対象として、ジェンダーロールとナショナルイメージという二つの規範がどのような共犯関係を結んできたかを討論しようとするものである。日中戦争期や中華人民共和国建国初期において、演劇・映画がプロパガンダの役割を果たす中で、視覚イメージとしてのジェンダーロールはいかに形成され、変容したのか。本来、伝統的な中国演劇において、ジェンダーロールは「行当」と呼ばれる役柄類型によってあらかじめ規定されている。中国演劇が現代化していく過程において、この役柄類型がずらされ、ときに境界を越え、反転しさえする様相を明らかにすることが、第一の目的である。

第二の目的として、ジェンダーロールとナショナルイメージという二つの規範に回収されない「逸脱の表象」と呼ぶべきものがあらわれることを、演劇・映画の作品に即して指摘したい。そもそも「男性性」「女性性」というジェンダーロールは、それぞれの作品において破綻なく演じられていたのだろうか。この点についても、ナショナルイメージを覆す表象の可能性を意識しながら討論をおこなう予定である。

三須祐介（立命館大学）「秋海棠」から「紅伶涙」へ—移ろう“男性性”をめぐる—は、愛国のアナロジーとして日中戦争期に一世を風靡し、原作の小説から演劇や映画へと様々に変奏していった『秋海棠』を切り口に、男旦が女性を演じることと自らの男性性との間の葛藤や、香港映画版の変奏である『紅伶涙』（1965）における男旦から小生への変化の意味などについて分析する。

田村容子（金城学院大学）「救国の妓女」を描く中国映画—社会主義文化における女性の身体と国家の想像」は、日中戦争期から 21 世紀以降にかけての中国の演劇・映画に描かれる「救国の妓女」像に着目し、社会主義プロパガンダ芸術における女性の身体の意味づ

I 企画（演じられる性）

けと、その多義性について論じる。